戦争体験者と若者によるトークセッション－今、私にできること
主催：「若者から若者への手紙 1945←2015」手紙プロジェクト

司会者

北川直実（編集者、『若者から若者への手紙 1945←2015』共著者）

登壇者

河合節子（1939 年生まれ、83 歳、東京大空襲で母と弟 2 人を失う）

関口純平（1993 年生まれ、29 歳、会社員）

西山花音（1999 年生まれ、23 歳、大学生、
「わたし」と「れきし」展実行委員会）

【はじめの挨拶】

（北川）「手紙プロジェクト」は、2015 年の共著書出版以来、“戦争の時代を生きた若者”と“現代の若者”が「手紙」を通して交信し、若者達が“同世代”が経験した戦争について考えてもらうことを試みてきた。現在、国内外から集まっている手紙は 600 通余り。残念ながら、戦争体験者のほとんどがこの世を去り、返信のない一方通行の手紙である。

登壇した関口・西山さんは「手紙プロジェクト」で戦争体験者へ手紙を書いたが、体験者と直接話をした経験がなかった。今回のトークセッションは、体験者の方と一緒に登壇したい、という彼らの希望からスタートした企画。「手紙プロジェクト」ではできなかった「世代を超えての　“リアルな対話”」が実現することになった。

【企画趣旨】

戦争体験者の生の声を聞くことが難しくなりつつある戦後 77 年の今、戦争体験者ではない若者から河合さんへ率直な疑問をぶつけつつ、今の世の中を見つめ、3 名それぞれが「今、私にできること」について考える。

【構成】

〇第 1 部

〈河合さんによる紙芝居の披露〉

河合さん自作の紙芝居「知って下さい東京大空襲」の読み聞かせ。東京大空襲当時 5 歳だった　河合さんのこれまでの体験と共に、当時の社会状況や河合さんが出会ってきた他の戦争体験者の方々の置かれていた状況なども綴っている。

〈関口・西山から河合さんへ質問〉

●戦後、お父さんと千葉市で始めた暮らしはどんな暮らしだったか？

（河合）台風があると家ごと飛ばされてしまうのではないかと思うような家に住んでいた。近所には水道が 1 つしかなく、そこへ汲みに行く必要があった。小学生の頃から毎日薪でご飯と味噌汁を作っていた。あの頃の生活は、貧乏のどん底だった。

●そんな生活の中でも、楽しいことや嬉しいことにはどんなことがあったか？

（河合）鶏のお世話を担当し、鶏が卵を産むとそれをご近所に売って、得たお小遣いを当時は学校にこども銀行があったのでそこに預けて貯金していたことが楽しくて嬉しかった。また、小学　6 年生の時に、お父さんが再婚し、新しい素敵なお母さんと出会えた。そのお母さんも、空襲で家族を亡くされていたので、想いを共有できるところがあった。

●空襲によってお母さんと弟さんを亡くし遺体が見つからない中で、どのようにそのことを受け入れていったのか？
（河合）お父さんだけが迎えにきた時に悟った。その後お母さんや弟がどのようにして亡くなったのかを聞こうと思ってもなかなか聞けず、中学生のときに、聞いて見ようと思い「あのね」と話しかけた途端、お互いに涙したことがあった。戦後の写真集があり、それを見ていると、実際は違うのだろうけど、倒れている母親の写真があって、これは自分の母親なのではないかと思いながらいつも眺める。

●紙芝居には戦争孤児の話も出てくる。この紙芝居へ込めた思いとは？
（河合）戦争体験は人それぞれであり、孤児となった人は語ることもできないほどに壮絶な状況で生きてきたことも伝えたい。裁判の原告となったことで、多くの戦争体験者に出会い、中には孤児となった人もいた。お金がなく、食べるものもないことは社会のせいであるというのに、盗みを働いたということで治安の対象になっていた。そうして生きてきた人は自分から孤児だと言うこともできず、黙って生きてきた。自分はお父さんがいて、新しいお母さんにも出会ってラッキーだったとも言えるが、自分の体験だけが戦争の全てではない。

〇第２部
＜テーマ１＞大切にしたいこと、目指す社会、守りたいもの
（河合）民間人空襲被害者の救済を求めた裁判の原告となったが、裁判では敗訴し、救済するための立法が必要だという判決が出たため、国会会期中の毎週木曜日、議員会館前で国会議員に救済立法を求めた内容が掲載されたリーフレットを配る「こんにちは活動」を行っている。しかし、何年経っても事態は変わらず、諦めかけている人もいる。今年も成立しなかった。今の政府を支えているのは国民。国民一人一人も問われている。
（関口）空襲被害者と遺族の方が７－８年前まで裁判をしていたこと、目の前にいる河合節子さんは、今でも議員会館前で呼びかけなどして闘っていると聞いて、77 年前の出来事が私が生きている今と繋がっていると少し実感ができた気がしている。空襲被害者、遺族の方々が声を上げていなければ、私は、軍人軍属と民間人の補償に差があったこと、苦しみを知り、想像することはなかった。こんにちは活動で国会議事堂の見学に来た小学生に、救済法のパンフレットを渡しても、引率の先生が全部回収してしまうという話を聞いて、小学生もその親も知って考える機会を与えられない状況は、間違っているような気がした。
（西山）「こんにちは活動」に自分も参加してみて、リーフレットを受け取ってくれない人が多いのと同時に、この問題に関わっている人が高齢な方しかいないことに、空襲の問題は自分たちで解決しろというような、無関心で無責任で冷たい社会と同時に、自分自身の責任も感じた。また、 国会前には拡声器を使って訴える人も多い中、一人一人に訴えているところに切実さも感じた。河合さんは、子どもたちの未来のために活動されているとおっしゃっていた。私は、子どもが大好きで、大学では教育を学んでいるが、大好きな子どもたちの周りには様々な問題が転がっていて、子どもを取り巻く問題でありながら社会の問題であると気がつき、もっと社会に直接働きかけていく大人になりたいと考えるようになった。

＜テーマ２＞戦争被害を数で語るのか
（河合）普段から空襲犠牲者の読み上げを行っている。犠牲者を数で括られてしまうと、そこに一人一人がいて名前があったということがわからなくなってしまう。亡くなった人一人一人に名前があり、空襲の被害に遭うまでは生きていたということを忘れないでほしい。
（関口）このトークイベント前に、亥鼻山の千葉空襲犠牲者の碑を伊藤章夫さんにガイドいただき、見学した。碑の前で写真を撮っていると、通りがかりの女性が声を掛けてくださり、私たちの写真を撮ってくれた。伊藤さんはその女性に、「この碑は、千葉空襲で犠牲になった人たちの名前が刻まれていて…」と碑の説明をされた。たった１分程度だったけれど、女性はその碑を写真に撮って、関心を持ったように聞いていた。碑を作るということは、空襲の事を一人でも多くの人に知ってほしいというが目的の１つで、伊藤さんが、ためらいなく、「今日も暑いですね」というくらい自然に話し掛けて、一人知る人が増えたのを目の当たりにして感動した。私は、このような戦争や平和について話す場では戦争について話せますが、普段は、見知らぬ人も、友人にもなかなか話したり、共有することはできない。友人や知り合いには少しずつ話していきたいと思っているが、なかなか出来ない。
（西山）私は、「わたし」と「れきし」展の最初の展示の際には、ホロコースト犠牲者を犠牲者として数で括るのではなく、400 万の犠牲者がいるのであればそれだけの人生があり想いがあったということを伝えたいという思いで展示を作成した。誰一人として同じ命も人生もなく、一人一人に人生があり、思いがあり、大切な人がいたということを忘れてはいけない、数だけに注目してはいけないと、私も強く思う。

＜テーマ４＞今、私にできること
（西山）正直、自分って本当に無力だと思っていて、様々な問題に出会い、色々なことに関わるほどに、無力感が増していく日々。私一人じゃ社会は変えられないし、それどころか直接的に社会に働きかけるということもほとんどできない。でもだからこそ対話することを大切にしたい。対話するためには、相手の意見をしっかり聞きつつ、自分の意見も言葉にする必要がある。対話って真剣にやろうと思うと本当にしんどいが、違いも受け止めながら、言うことも、聞くことも諦めない。それは「戦争反対」と言えるうちに言うこと、子どものように弱い立場にある人の声を拾うこと、そういうことと繋がっているのだと思う。
（関口）河合さんと事前にお話した際に、私の内面や心情を戦争と関係させた質問をして、河合さんは答えるのが難しく、困らせてしまうことがあった。質問自体が、私個人の問題で、戦争とは結びつかないのかもしれないが、もう一つは、河合さんと私は、3 世代くらい年代が離れていて、世代間の考えの違いや理解しづらい部分があるので、当然、戦争を考えようとした時にも　　ギャップ、共感しづらいことがお互いにあるのだと感じた。その点では友人を始め、同じ世代と戦争のことを話し合っていくことをしなければ！もっと横の繋がり作っていこう！と強く感じた。

【登壇者の感想】
（河合）
　北川さんから若者とのトークセッションの提案がありましたが、「戦争体験者」というには私はふさわしくないと思いました。戦争中はまだ幼く、ほとんど覚えていません。しかし、会場まで足を運べる年長者が少ないのも現実なので、お引き受けしました。
　対話する若者が戦中戦後の日常生活に興味がある様子なので、なるべく具体的にお話ししました。西山さん、関口さんが質問を設定してくれたので、それに答える形式でした。聴衆は私と同年配も多くて、退屈なさったかと思いますし、ご自分の体験も聞いてほしいという方もあったでしょう。質問をしてくれた若者、少数ながら会場に参加していた若者にはどう届いたでしょうか。
　先の戦争が終わってからでも７７年、町に痕跡は見えないけれど、まだ戦争を引きずって苦しんでいる人がいる。戦争が地球環境も人間の命も、心も破壊することを伝えたいです。今また　　ウクライナで新たな破壊が起きています。
　若者が戦争を身近なこととしてとらえ、自分たちの時代に戦争を招きいれないように、戦争に巻き込まれてしまったと言わないように、地球上から戦争をなくすように、「私にできること」を考える機会としてほしいと願います。
（関口）
　トークイベントの壇上で「友人や身近な人、同世代と、今日のピースフェアや戦争の話を共有して、話し合ってみたい」と、1 日、ピースフェアを見て聞いて、参加しての素直な思いを話しました。
　私にとって、今まで戦争について話すことをなんとなく避けてきた友人達に対して、戦争の話を持ち出すことは、ピースフェアのようなイベントの壇上に上がって話すより、ずっとハードルが高いのです。
　トークイベントが無事に終わり、壇上を降りた時、「私も友人、知人に戦争のことを話すことができないの。少しずつ話していくことが今の目標なの」と私の思いに共感してくださった女性がいました。ピースフェアの関係者の方だと思います。
　ピースフェアに携わって戦争や社会問題について発信されている方は、芯があって、自分の考えを持っている。言い方を変えれば、若い世代の考えや迷いには耳を傾けてもらえない、共感されないのでは？という先入観をもっていました。
　登壇直後に同じ目標を持っていると話していただいた女性、一緒に登壇した河合節子さんは、私たちの世代(若者)にどう戦争を伝えるか考えている姿を見て、同じように悩み、今も進行形で考えているのだと気付きました。
　共感されないだろうという先入観や自分が浮くかもしれないという恐さを超えて、自分の考えを人に話してみる、同世代、異なる世代と対話してみることで分かり合えることがある、ということを体験できました。
（西山）
　ステージ発表に至るまでには、何度も打ち合わせを重ね、河合さんのご自宅にも伺わせていただき、言葉を交わす時間を丁寧に作り出そうと試みてきたつもりです。お茶を飲み、手作りのおかきをいただき、猫ちゃんと戯れるなどしながら、少しずつ言葉を交わしていくことで、戦争体験者としてではなく、一人の人としての河合さんの姿が見えてきました。こうして河合さんという一人の人と出会う[illegible]通して、実は自分の周りには戦争体験者はたくさんいて、その人たちの言葉を拾い[illegible]、言葉を交わしに行く努力を私が怠って

きただけなのかもしれないと思うようになりました。77 年前のことを遠い過去と感じ、戦争体験者は周りにはいないと感じるのはなぜなのかということを辿れば、自分自身の無関心さと不勉強さが際立ってきます。77 年前も生きていた方達は今でもたくさんいるというのに、なぜこんなにも過去のものとして感じてしまうのだろう。私はやっぱり、意識しなければ見たいものばかりを見るような人間なんだろうな、と。

こんなことを考えている私が「若者なのに関心を持っている」と珍しがられ、注目されることに違和感も感じています。今回の企画は、「戦争体験者と若者によるトークセッション」と自ら名付けたわけですが、そんなに若者って大事なブランドなのでしょうか。河合さんのお話を伺いながら、自分自身の想いも河合さんに受け取ってもらう中で、若者だからとか戦争体験者だからとか、そういうカテゴライズも時には必要ですが、それをも超えて、一人の人間同士として向き合ってみることこそが今大切なことではないかと考えました。

今回の企画を通して、私は初めて戦争体験者と直接お話をすることができました。こうして機会を頂けたことに感謝して、自分にできることを、今、実践し続けていきたいです。

【参加者の感想】

河合さんへ

戦争体験というものについて、これまでずっと、仰々しくて、安易な気持ちで近づいてはいけないもののように感じていました。

絶対に聞いておくべきだし、気にはなるのですが、自分にはその大事な出来事を受け止める準備がまだできていないように思って躊躇ってしまうのです。

戦争を経験している自分の祖父に対しても、改まって聞こうとすると、なんと切り出してよいのか、なにを知りたいのかわからなくなってしまいます。

どれだけわかろうとしても、あのときなにがあったのか、絶対に、完全に理解することはできないことへの恐れがあるのかもしれません。

これまでにも、お会いして、ご自身が戦争中に体験したことをお話してくれる方は何人もいらっしゃいました。

ただ、目の前の人が見ていたもの、聞いていた音が、実感として湧き上がってくるようにはなかなかならなくて、「大変だったのだな」としか思えない自分が情けなくて、戸惑うことが多かったように思います。

その人が話す景色が、自分とはずっとかけ離れたところにあるような感覚がありました。

今回のトークイベントではっとしたのは、戦争は河合さんの人生の中の重要な一部ではあっても、全てでは決してないのだという事実です。

戦争が始まる前から、地域、家族の生活があり、戦争を経て、戦後もずっと暮らしは続いていったということ。

そして、今、目の前に河合さんがいて、私と同世代の 2 人と対談をしているのだということ。

「戦争の話」として構えて聞くのではなく、目の前の「河合さんの人生」の一部を聞いていると思うと、不思議とお話がすっと頭に入りました。

戦争という「特別な」出来事は、「ありふれた」毎日の中にあったのだということ、「あり

ふれた」毎日を破壊する、「特別な」出来事であったということ。
河合さんが経験してきたことを、私は想像することしかできませんが、体温のある記憶を共有させていただいたと強く感じています。
河合さんの声で、目の前で、お話をお聞きすることができて良かったです。
ありがとうございました。　　井上未菜（大学生）

【トークセッションを終えて】
（北川）
「世代を超えてのリアルな対話」は手探りで始まりました。
若者達の中には、戦争体験者の方に何を聞いたらよいのだろう、こんなことを聞いたら失礼ではないだろうかという戸惑いがありました。一方、河合さんにも初めて出会う戦争体験者が自分でよいのだろうかという遠慮があり、孫世代の若者達にどんなことを聞かれるのだろうかと恐る恐る待っていたそうです。
私は若者二人に等身大の河合さんに触れるために国会前やご自宅へうかがうことを提案しました。また、河合さん達が建立した亥鼻公園の平和祈念碑へのフィールドワークを企画し、千葉市空襲犠牲者の読み上げにも誘いました。
そういう経験を一つひとつ積み重ねる中で、西山さんは遠い存在だった「戦争体験者」である河合さんを一人の人として「実感」するようになり、関口さんは河合さんもまた自分達の世代にどう戦争を伝えるか悩み試行錯誤されていることに気づいていきました。この「実感」や「気づき」こそが、非体験者である私達が体験者の語る体験を想像し理解しようとするとき、またその想いを受け止めようとするときに大事な“手がかり”になっていくことでしょう。「体温のある記憶」を参加者の井上さんが共有されたのも、河合さんと同時代を生きている「実感」が持てたからこそでしょう。私達に残された時間はわずかですが、戦争体験者と非体験者が交流する機会をつくること、それが「今、私にできること」なのではないかという思いを新たにしました。
ピースフェア終了後、登壇した若者からメールが届きました。世代を超えて、体験者の想はちゃんと届いたようです。
「今回は立ち上げから関わって１つのイベントが無事に終えることができ、嬉しく、感慨深いです。河合さんと対面する機会を設けていただいた北川さんに感謝します。今日も河合さんの言葉を思い出しますし、何年か経った時に、河合さんとの交流した時間が、戦争を考える上で軸のようなものになるのではないかと、想像しています。」
今回の「ピースフェア」では、河合さん、関口さん、西山さん、「わたし」と「れきし」展実行委員会をはじめ、多世代にわたる方々との出会い、コラボ、交流が生まれました。ステージ外でも、豊かな対話の時間を持つことができ、何より楽しかったです。先が見えない不安な時代だからこそ、私たちは語り合うことを求めていました。世代を超えて、共に戦争のない社会を創っていこうとする仲間に出会えたような気がしています。最後になりますが、それぞれが思い思いに「平和」のために活動している団体・グループ・個人が一堂に会する「ピースフェア」という場を、ここ千葉に作り長年育ててきてくださったスタッフの皆様に敬意を表すると共に心より感謝申し上げます。来年以降もピースフェアが続いていくように、微力ながら関わっていけたらと思っています。